

高機能広汎性発達障害者に対する「エブリクラブ」の実践に関する報告 (第3報)

—実践論と運営論の包括的検討にむけた予備的研究—

佐々木 全*・名古屋 恒彦**

(2013年5月7日受理)

Zen SASAKI・Tsunehiko NAGOYA

A Practical Study of "Eburi Club" for Young Men With High Functioning Pervasive Developmental Disorders (3)

I 問題と目的

筆者らが取組んでいる「エブリクラブ」は、高機能広汎性発達障害^{注)}のある中学生以上の年代の青年たちを対象とした地域における休日活動である。これは、小学生年代を対象とした「エブリ教室」からの継続を意図して2000年に立ち上げられた(佐々木, 加藤, 2005¹⁾)。

この活動の意義について、筆者らは次の二つのテーマの接点として考えている。一つは、「ライフステージ」への着眼であり、高機能広汎性発達障害を含む発達障害児者の青年期支援というテーマである。近年このテーマは、教育、福祉、医療、就労、司法など多様な角度からの注目がなされている(例えば、佐藤, 徳永, 2006²⁾; 山口, 2006³⁾; 西村, 2006⁴⁾; 日本LD学会研究委員会研究プロジェクトチーム, 2008⁵⁾; 近藤, 光真坊, 2006⁶⁾; 清水, 加賀, 山本, 内藤他, 2006⁷⁾; 梅下節瑠, 2004⁸⁾; 松浦, 岩坂, 藤島, 橋本他, 2007⁹⁾; 岩手LD研究会, 2010¹⁰⁾)

もう一つは、「ライフシーン」への着眼であり、高機能広汎性発達障害を含む発達障害児者の地域における休日活動というテーマである。近年、青

年たちにとって、学校や職場、家庭に次ぐ第三の場として、地域の居場所の必要性が指摘されている(はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会, 2011¹¹⁾; 2013¹²⁾)。

エブリクラブでは、参加者にとっての、「活動に打ち込むこと、仲間と共に活動の経過や成果を分かち合うこと」の実現を目指している(佐々木, 加藤, 2009¹³⁾)。そのことが、青年たちのライフステージとライフシーンを支える一助となることを願っている。

さて、エブリクラブのような支援グループには、そのミッションの実現に直接的に資する営みがある。筆者らはこれを「実践論」と称し、支援内容や方法に関する評価や改善の検討をするものと考えている。エブリクラブのような本人活動の実践は、全国各地にあり実践論の報告が多い(例えば、芦澤, 宇根本, 2002¹⁴⁾; 末永, 蔦森, 吉成, 2003¹⁵⁾; 定徳, 森本, 清水, 2012¹⁶⁾; 西村, 小貫, 村田, 高橋, 2012¹⁷⁾)。実践論は、支援グループが自身の活動におけるミッションの実現を追究するものであり、「目的価値」を有すといえる。

一方、エブリクラブのような支援グループの持続可能性を高め、そのミッションの実現に間接的

*いわて高機能広汎性発達障害等のある人を支援する会、**岩手大学教育学部

に資する営みがある。筆者らはこれを「運営論」と称し、運営内容や方法に関する評価や改善の検討をするものと考えている。運営論の報告は、未だ少なく、第一筆者がかかわった支援グループを中心に試みられている（例えば、佐々木、三田、2009¹⁸⁾；佐々木、佐々木、安部、三田、2009¹⁹⁾；佐々木、高橋、三田、2011²⁰⁾；佐々木、名古屋、2012²¹⁾；佐々木、2012²²⁾）。

これら、実践論と運営論は、エブリクラブのような支援グループにとっての普遍的なテーマであろう。また、実践論と運営論には相互の影響が想定される。例えば、体育館での活動をしたいが、地域で借用可能な施設が無いために活動内容を変更したという場合や、キャンプに行きたいので、相応のスタッフの人数を得られるよう地域に働きかけ、スタッフ集団を組織したという場合である。

そこで、支援グループにおけるミッションの実現に資する持続可能で実効性ある方法論を見出そうとするとき、両者を関連づけながら包括的に検討すること、すなわち「実践論と運営論の包括的検討」が必要である。

これまで筆者らは、エブリクラブを実践論としてエブリクラブの実践報告を行った（佐々木、加藤、2005²³⁾；佐々木、加藤、2009²⁴⁾）が、今後、エブリクラブの運営論としての報告を経て「実践論と運営論の包括的検討」に着手したいと考えている。

II 目的と方法

本稿は、筆者らが後に取組もうとする「実践論と運営論の包括的検討」のための一資料を得ようとするものであり、エブリクラブの運営状況を明らかにすることを目的とする。

研究の方法は、エブリクラブにおける実践及び運営に関する資料の整理とその内容の分析である。資料は、2009年3月から2013年3月までのエブリクラブの実践及び運営記録である。この内容として、活動後発行の会員宛の通信（「エブリ通信」）とスタッフの事後ミーティングの記録、運

営に関する記録綴りと、公表されている実践報告で本稿末尾に文献として掲げたもの、ならびに運営実態調査への回答（佐々木、2013²⁵⁾）を得た。

整理と分析に際しては、その運営実態調査（以下、佐々木の実態調査と称する）の項目として用いられた三観点を再構成し、それに即して運営状況を整理し評価する。具体的には、人的環境（運営を担う中核スタッフ、活動を支える実働スタッフ、スタッフ間のコミュニケーション）、経営的環境（経費の調達と用途）、実働的環境（会場や物品などのハード面、活動内容のレパートリーなどのソフト面）であったが、これらについて、NPO等任意団体の運営論として一般的に指摘される観点（島田、2005²⁶⁾）を参照し、「ヒト（人材、すなわち人的環境）」、「モノ（会場や物品などのハード面）」、「カネ（資金、すなわち経費の調達と用途）」、「コト（情報、すなわち活動内容のレパートリーなどのソフト面と、その他の必要情報）」の4観点に再構成して用いる。

III 結果

エブリクラブの概要ならびに運営状況について、図1に一覧した。これは佐々木の実態調査に対する回答を基にした。ただし、調査当時の2009年度以降の運営状況の変更情報を更新した。

1 エブリクラブの概要

エブリクラブは、2000年度から2009年度まで岩手大学教育学部附属実践総合センターにおける教育臨床の事業として加藤義男教授（当時）の指導の下で第一筆者によって開催された。2010年度からは、岩手大学からは独立した形で、第一筆者が代表を務める「いわて高機能広汎性発達障害のある人を支援する会（通称、エブリの会）」の事業の一環として開催している。

エブリクラブでは、高機能広汎性発達障害^{注)}のある中学生以上の年代の青年たちを対象とした、地域における休日活動の提供をミッション

とし、参加者にとっての、「活動に打ち込むこと、仲間と共に活動の経過や成果を分かち合うこと」の実現を目指している。

エブリクラブの対象、すなわち参加者は、年度ごとにメンバー登録を更新することになっている。2012年度においては、16名（男女比=15：1）であり、エブリ教室から継続的に参加しているのは

7名である。メンバーの年代の内訳は、中学生3名、高校生6名、大学等の学生3名、成人4名である。ここでいう大学等の学生には専門学校や専攻科、大学に所属しているメンバーを意味する。成人は、在学ではないメンバーを意味し、就労の有無など状況は様々である。最年長は、22歳である。また、登録メンバーの居住地域は、盛岡市と

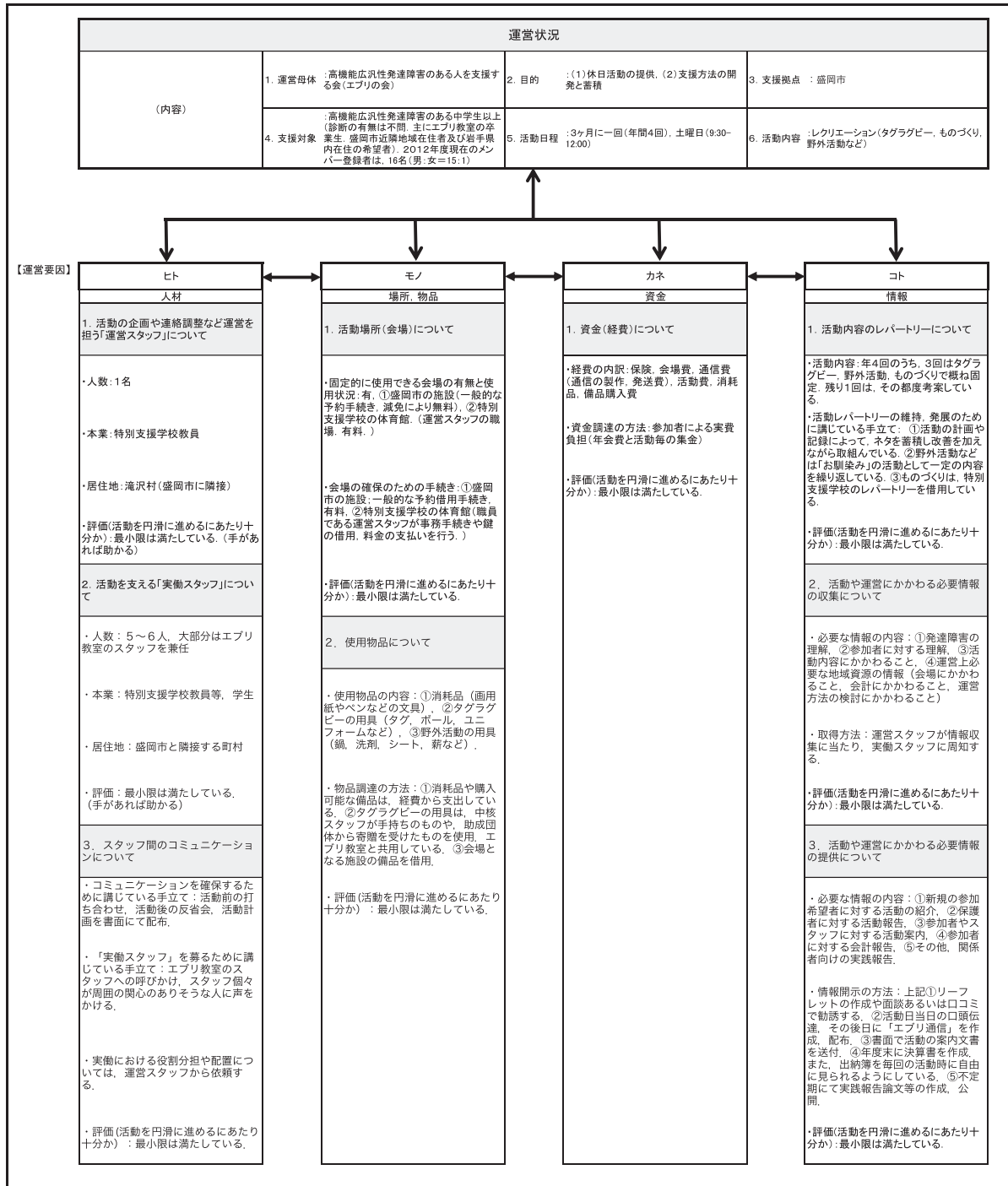


図1 実践及び運営状況の包括的関連図

隣接する町村を中心として、岩手町、花巻市、北上市、宮古市である。なお、きょうだいの参加もある。その中には、高機能広汎性発達障害等の発達障害がある児者もいる。2009年3月～2013年3月までの期間におけるメンバーの参加者数は、9～18名であり平均すると14名、述べ224名である。

エブリクラブの開催は、年に4回（3ヶ月に一回を目処）とし、原則的に土曜日の午前中（9：30～11：30）である。なお、スタッフは活動時間前後45分程度、準備片付けと活動についてのミーティングを行う。

2 エブリクラブの運営状況

（1）「ヒト（人材、すなわち人的環境）」

まず、活動の企画や連絡調整などの事務局業務を担う運営スタッフについてである。これは、第一筆者である。一個人に依拠した運営においては、持続可能性を脅かすリスクなどもある。また、参加者からの要望で、活動の回数を増やしてほしいとすることがあるものの、運営者一個人の事情によってそれが実現できないといった制限もある。チームとして複数のメンバーで運営するような体制作りが課題として指摘されている。

次に、活動を支える実働スタッフについてである。これは、運営スタッフを兼ねる第一筆者を含めた社会人（特別支援学校教員等）、学生である。エブリクラブでは活動が単発であるために、活動内容やメンバーの参加申し込み人数に応じて、スタッフの必要人数を募っている。その参加者数は3～10名であり平均すると6.3名、述べ102名である。エブリ教室兼任のスタッフを中心とし、エブリクラブを経験済みのリピーターのスタッフや、新規参加のスタッフもいる。佐々木の実態調査における実働スタッフに関する評価としては、量的な側面について、「必要十分」、「必要最小限は満たしている（余力がほしい）」、「やや不十分（助力がほしい）」、「不十分」という4段階評価のうち、「必要最小限は満たしている（余力がほしい）」ということだった。

なお、実働スタッフに関する質的な評価も運営

上必要な着眼点であろう。このことは、運営スタッフと実働スタッフ間でのコミュニケーションに規定されることであろう。運営スタッフからは、活動前後のミーティングにおいて、活動内容や参加者についての必要情報を提供しその共有に努めている。併せて活動中の役割分担なども打ち合わせ依頼する。また、新規スタッフに対しては、スタッフ集団の中でフォローしあう。繰り返しの参加によって他のスタッフや参加者との親交も深まる。活動場面での支援にも手馴れていくことができる。これはオン・ザ・ジョブトレーニングという側面であり、「ヒト」という運営要因の質を相互に向上させる最も自然な取組み方であろう。

（2）「モノ（会場や物品などのハード面）」

会場については、2009年度以前には岩手大学教育学部を会場とした。この時期には、エブリクラブは大学が関与する事業だったために、大学内の施設等が使用できた。しかし、その後には、運営母体を独立させたために、盛岡市近隣の一般施設を予約借用手続き、有料という条件を経て借用している。

物品については、活動内容に即して必要物品を調達する。一部は、備品を準備したり、自作したりしているが、個人からの借用、会場施設等関連施設からの借用などがある。また、野外活動で使用する薪などは、特別支援学校で廃棄される木材などを譲り受けるなど活用している。

佐々木の実態調査における「モノ」に関する評価としては、「必要十分」、「必要最小限は満たしている（余力がほしい）」、「やや不十分（助力がほしい）」、「不十分」という4段階評価のうち、「必要最小限は満たしている（余力がほしい）」ということだった。活動内容や活動予定日に合わせて会場を確保しようとするために、予約手続きや他団体との競合があり運営スタッフには多少の心労が付きまとうためであった。また、備品管理も個人宅においては購入や保存管理に限度があり、それを前提とすると、購入や自作を躊躇せざるをえないこともあった。

（3）「カネ（資金、すなわち経費の調達と用途）」

資金は、参加者からの集金による。その用途は活動にかかる実費であり、内訳は保険、会場費、通信費（通信の製作、発送費）、活動費、消耗品、備品購入費である。一般の会場の借用に伴う経費について、その一部の免除などを申請したり、消耗品の使用方法を工夫したりし、参加者の実費負担をできるだけ軽減するよう努めている。集金の方法は次の2つがある。すなわち、①年会費800円。（事務経費、保険、消耗品、通信など）、②活動費（毎回の活動にかかる経費）である。活動費は、活動内容ごとに経費が異なるため、流動する。例えば、タグラグビーでは、飲み物や消耗品代として200円程度、野外活動では芋のこ汁の材料費として300円程度、ものづくりでは、題材によって材料費が異なるが200円～1000円程度である。

佐々木の実態調査における回答では、「カネ」に関する評価としては、「必要十分」、「必要最小限は満たしている（余力がほしい）」、「やや不十分（助力がほしい）」、「不十分」という4段階評価のうち、「必要最小限は満たしている（余力がほしい）」ということだった。「余力」とは、「立替払いが多いことの解消」、「参加者の実費負担の軽減」を図りたいことによるものであった。

（4）「コト（情報、すなわち活動内容のレポーターなど）」

まず、活動内容に関するレポーター情報である。これについて、2009年3月～2013年3月までの活動実績として表1に一覧した。これは、エブリクラブに関する先の実践報告（佐々木、加藤、2009²⁷⁾）で取り上げた期間以降のものである。これによると、近年ではものづくり6回、タグラグビー5回、野外活動4回、風船バレー1回であった。そもそもエブリクラブは年4回（3ヶ月に1回）の開催であるため、活動内容は各回で完結するような企画としている。また、活動内容では、創作、スポーツ、レジャーなど様々な分野の活動に取り組むように努めている。近年、風船バレーの回数が少ない。2008年度以前においては、風船バレーは活動レポーターとして定着していたが、

近年では、風船バレーと同じスポーツ分野の活動としてタグラグビーの定着があることと、ものづくりの充実によって、採用されなくなった。

タグラグビーが活動レポーターとして定着した理由は、エブリクラブの参加者やスタッフの中でエブリ教室での取組みを経験したメンバーが増えたことと、豊富な運動量とゲーム自体の楽しさというタグラグビー自体の魅力、エブリクラブでの取組みによって活動における支援方法の蓄積があることによる。ものづくりの充実は、第一筆者が当時勤務していた特別支援学校におけるものづくりの題材の共有等があり、準備をしやすかったこと、参加者にとって取組みやすく成果を得やすいことによった。さらに、ものづくりでは題材を準備することができれば、当日の活動は少ないスタッフでの対応が可能になることも運営上のメリットであった。なお、ここでいうメリットとは、少ない人員で活動をせざるを得ない状況を前提とした消極的な意味である。不安定な運営要因である「ヒト」を補完するという意味合いである。

佐々木の実態調査における「コト」に関する評価としては、「必要十分」、「必要最小限は満たしている（余力がほしい）」、「やや不十分（助力がほしい）」、「不十分」という4段階評価のうち、「必要最小限は満たしている（余力がほしい）」ということだった。活動内容について、運営者一人だと発想に限界があり、活動の展開が独善的になりやすいという懸念があるためだった。数名で活動内容の企画や見当ができればよいが、第一筆者を含めたスタッフのほとんどが社会人であるために、活動日以外に集うことは難しい。そこで、それを補う方法として自然発生的に取組まれていることは、毎回の活動の反省点を次回に活かすことで活動の改善を図っていくやりかたである。すなわち年間の各活動回の内容に定めておき、その繰り返しによって、改善の取組みがしやすくなり、スタッフ間での題材理解が促進されやすくなる。さらに、この一助としてエブリ教室での取組みや特別支援学校で開発されたレポーターの借用がある（佐々木、2011²⁸⁾；佐々木、2012²⁹⁾ 佐々木、

表1 エブリクラブの活動実績

開催日	活動名	活動内容	活動の場	参加者		スタッフ人数	
				内訳	備考		
1	2009 3 20	劇の観賞とものづくり (キャンドル)	エブリ教室の劇の発表を観賞し、その後キャンドルを製作した。	岩手大学教育学部附属教育実践総合センター	小学生1名、中学生4名 高校生6名、計11名	きょうだい3名(小学生、中学生、高校生各1名ずつ)を含む。	スタッフ3名(いずれもエブリ教室兼任)
2	2009 6 27	タグラグビー	4チームに分かれ、「タグラグビー」のリーグ戦を行った。	公立M特別支援学校体育館	小学生4名、中学生9名 高校生2名、計15名	きょうだい4名(小学生のみ)を含む。	スタッフ5名(エブリ教室兼任が2名、他2名)
3	2009 9 26	野外活動(遠足)	エブリ教室との合同行事。 2チームに分かれ、羊の子汁を調理し、会食を行った。	盛岡市内のキャンプ場	就学前幼児1名、小学生2名、 中学生7名、高校生2名、計12名	きょうだい4名(就学前幼児1名、小学生2名、高校生1名)を含む。	スタッフ8名(エブリ教室兼任が5名、他3名)
4	2010 1 9	ものづくり(モザイクパネル)	木製フレームを組み立て、その内側に、思い思いの木材パーツを組み合わせて貼り付けた。	盛岡市内の公民館	小学生2名、中学生4名、 高校生4名、成人1名、計11名	きょうだい3名(小学生2名、高校生1名)を含む。	スタッフ7名(エブリ教室兼任が4名、他3名)
5	2010 3 21	風船バレー	4チームに分かれ、「風船バレー」のリーグ戦を行うもの。「風船バレー」は、床に膝立ちで行い、得点を競った。	盛岡市内の公民館	小学生3名、中学生5名、 高校生7名、計15名	きょうだい5名(小学生4名、高校生1名)を含む。	スタッフ7名(エブリ教室兼任が3名、他4名)
6	2010 6 12	タグラグビー	4チームに分かれ、「タグラグビー」のリーグ戦を行った。	公立特別支援学校体育館	小学生4名、中学生6名 高校生7名、計18名	きょうだい7名(小学生4名、中学生1名、高校生1名、成人1名)を含む。	スタッフ7名(エブリ教室兼任が6名、他1名)
7	2010 9 25	野外活動(遠足)	エブリ教室との合同行事。 2チームに分かれ、羊の子汁を調理し、会食を行った。	盛岡市内のキャンプ場	小学生3名、中学生6名、 高校生4名、計13名	きょうだい3名(小学生のみ)を含む。	スタッフ10名(エブリ教室兼任6名、他4名)
8	2011 1 8	ものづくり(木製万年カレンダー)	木製フレームを組み立て、その内側に木製キューブに曜日や数字を印刷し納め製作した。	盛岡市内の公民館	小学生4名、中学生7名、 高校生4名、成人1名、計16名	きょうだい5名(小学生4名、成人1名)を含む。	スタッフ3名(いずれもエブリ教室兼任)
9	2011 3 20	(東日本大震災の影響で中止。)	—	—	—	—	—
10	2011 6 11	タグラグビー	4チームに分かれ、「タグラグビー」のリーグ戦を行った。	公立特別支援学校体育館	小学生5名、中学生4名 高校生4名、成人2名、計15名	きょうだい6名(小学生5名、成人1名)を含む。	スタッフ4名(いずれもエブリ教室兼任)
11	2011 9 23	野外活動(遠足)	エブリ教室との合同行事。 4チームに分かれ、羊の子汁を調理し、会食を行った。	盛岡市内のキャンプ場	小学生2名、中学生5名、 高校生3名、成人3名、計13名	きょうだい2名(小学生のみ)を含む。	スタッフ11名(エブリ教室兼任7名、他4名)
12	2012 1 14	ものづくり(和風ランブシェード)	木製フレームを組み立て、骨組みとし、和紙を貼り付けた。これに電気パーツを納め製作した。	盛岡市内の公民館	小学生6名、中学生3名、 高校生5名、成人2名、計16名	きょうだい6名(小学生のみ)を含む。	スタッフ5名(エブリ教室兼任が4名、他1名)
13	2012 3 17	ものづくり(木製鉢カバー)	定型の木材パーツを重ねて接着し、木製鉢カバーを製作した。	盛岡市内の公民館	小学生2名、中学生4名、 高校生2名、成人1名、計9名	きょうだい2名(小学生のみ)を含む。	スタッフ5名(いずれもエブリ教室兼任)
14	2012 6 9	タグラグビー	4チームに分かれ、「タグラグビー」のリーグ戦を行った。	公立特別支援学校体育館	小学生3名、中学生2名 高校生3名、成人3名、計11名	きょうだい3名(小学生のみ)を含む。	スタッフ4名(いずれもエブリ教室兼任)
15	2012 10 20	野外活動(遠足)	エブリ教室との合同行事。 4チームに分かれ、羊の子汁を調理し、会食を行った。	盛岡市内のキャンプ場	小学生1名、中学生2名、 高校生4名、成人4名、計11名	きょうだい2名(小学生、成人各1名)を含む。	スタッフ9名(エブリ教室兼任が7名、他2名)
16	2013 1 12	ものづくり(木製フォトフレーム)	定型の木材パーツを組み立て、木製フレームを製作した。	盛岡市内の公民館	小学生5名、中学生1名、 高校生3名、成人3名、計12名	きょうだい3名(小学生のみ)を含む。また、他の小学生2名は6年生であり、次年度からエブリクラブのメンバーになる予定、試行的な参加とした。	スタッフ4名(エブリ教室兼任が3名、他1名)
17	2013 3 20	タグラグビー	5チームに分かれ、「タグラグビー」のトーナメント戦を行った。	盛岡市内の公民館	小学生5名、中学生5名、 高校生3名、成人3名、計16名	きょうだい3名(小学生のみ)を含む。また、他の小学生2名は5年生であり、試行的な参加とした。	スタッフ10名(エブリ教室兼任が5名、他5名)

名古屋, 2014³⁰⁾).

次に、「コト」における、活動や運営にかかわる必要情報の収集についてである。これには、発達障害一般の理解や、参加者（その生活状況、支援方法）に対する理解、運営に資する地域資源（会場として使用できる施設や助成等の手続き）などがある。運営スタッフが収集し、必要情報は、実働スタッフにしている。

Ⅳ 考 察

運営状況を記述するために用いた4観点「ヒト」「モノ」「カネ」「コト」は、運営状況の規定要因としての意味も持つ。そして、これらが運営状況に対して影響する内容、度合いは、均一なものではない。「ヒト」「モノ」「カネ」「コト」それぞれが運営状況に対する影響力の強弱を持ち、相互作用が生じるだろう。その内容も様々あり、因果的であったり、相補的であったりするだろう。

まず、因果の例である。活動にかかる経費の金額は、活動内容によって規定されている。すなわち、「カネ」の規定要因として「コト」がある。

同様の例は、会場が活動内容の設定によって規定されていることである。しかし、これは、会場の選択が比較的容易である状況であるからこそ成立する因果関係である。場の制約が強ければ、因果は逆に働くことになるだろう。すなわち、「活動内容としてタグラグビーを実施したいならば、体育館を確保する」ということではなく、「体育館が確保できず、会議室しか確保できないならば、活動内容としてのものづくりを実施する」ということである。因果関係の方向は、可能性として双方向である。

次に、補完の例である。ものづくりに取組む際、この題材の準備状況によっては、「ヒト」におけるスタッフが少人数で済むということがあった。すなわち「ヒト」における不利を「モノ」で補完するということである。なお、活動内容によってスタッフの人数について、活動内容が規定される

ことがある。野外活動やタグラグビーにおいては、参加者の人数によって、必要なスタッフの人数がおおよそ確定的に算出している。ここでは、「ヒト」の量的な側面を「コト」が補完的に規定している。

本稿は、エブリクラブにおける「実践論と運営論の包括的検討」のための一資料を得ることを目指し、その運営状の一端を明らかにした。今後、実践状況と運営状況を対照させ包括的に検討することで、相互作用の内容を明らかにしていくことで、持続可能で実効性ある運営方法に接近できるだろう。エブリクラブにおいては、各活動回で活動内容が異なるために、その運営状況も異なる面もある。そこで、各活動回の運営状況を事例検討していくことも必要であろう。このとき、図1に示した「実践及び運営状況の包括的関連図」を雛型として事例の記述表現を試み、これをもって、実践論と運営論の包括的検討の方法の一試行としたい。

また、運営論では、活動の理念をいかに方向付け、継承していくかという現実的な課題への着眼手も必要である。これは、エブリクラブに限らず、支援活動を実施している団体等主催者には絶えず求められるものである。責任ある活動や支援をしていく上で、一定の理念を継承していくことは不可欠である。同時にその理念は実際の活動や支援によって具体化されていくものである。この点は本稿における「ヒト」「モノ」「カネ」「コト」すべてに関係するが、とりわけ「ヒト」における質的側面に関する課題として位置づけられる。すなわち、スタッフも含め、メンバー全員が共有できる活動の理念の継承が望まれる。エブリクラブにおいてこのことは、「活動に打ち込むこと、仲間と共に活動の経過や成果を分かち合うこと」の実現を不断に追究し具体化していくことによって担保されよう。

関係の支援活動団体のよりよい実践と安定的で恒常的な運営が実現されることを願って止まない。

謝 辞

エブリクラブのメンバーと保護者の皆様、共に活動したスタッフ諸氏に記して感謝いたします。

注 釈

高機能広汎性発達障害とは、「知的障害を伴わない広汎性発達障害」という意味である。すなわち、知的障害を伴わない自閉症（いわゆる高機能自閉症）、アスペルガー障害、特定不能の広汎性発達障害包括する概念である。

これら診断名（障害名）の表記については、適語を検討中である。

文 献

- 1) 佐々木全, 加藤義男 (2005): 高機能広汎性発達障害児の指導に関する実践的研究 (3) - 「エブリクラブ」の教育実践に関する報告 - (第一報) - 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 4, 129-146.
- 2) 佐藤克敏・徳永豊 (2006): 高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援の現状, 特殊教育学研究, 44, 3, 157-164.
- 3) 山口薫 (2006): 大学におけるLD学生への学習支援一星槎大学の試み, LD研究, 15, 3, 297-301.
- 4) 西村優紀美 (2006): 学生相談の立場から, LD研究, 15, 3, 302-311.
- 5) 日本LD学会研究委員会研究プロジェクトチーム (2008): 大学における発達障害のある学生支援事例の実態調査報告一試行的取り組みに見る支援の実際とサポートの充実に向けて一 LD研究17, 2, 231-241.
- 6) 近藤隆司・光真坊浩史 (2006): 高等学校における軽度発達障害をもつ生徒への就労支援の試み, 特殊教育学研究, 44, 3, 1, 47-54.
- 7) 清水聡, 加賀信寛, 山本仁, 内藤孝子, 梅永雄二 (2006): 軽度発達障害者の就労と社会自立を考える, LD研究15, 1, 57-71.
- 8) 梅下節瑠 (2004): 家庭事件に見る成人の高機能広汎性発達障害 ころの臨床, 23(3), 306-311.
- 9) 松浦直己, 岩坂秀樹, 藤島清, 橋本俊顕, 十一元三 (2007): 多様な発達の困難性のある少年に対する, 矯正教育における一事例一個別の教育的ニーズに基づいた支援を通して一, LD研究, 16, 3, 332-344.
- 10) 岩手LD研究会・編 (2010): 岩手発, 発達障害のある青年たちの現状と展望一連携, その実質化を願って一.
- 11) はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会・編 (2011): 岩手発, 青年たちのニーズと支援の間～夏のシンポジウムを読み解く, はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会 (花童・風童) 年報, 7, 13-16.
- 12) はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会・編 (2013): ラウンドテーブル学習会 花巻発, 青年たちの「包括的支援モデル」をどうする!?～ラウンドテーブルPART 3 ご本人のニーズや思いを軸にしてつながりあう, はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会 (花童・風童) 年報, 9, 32-45.
- 13) 佐々木全, 加藤義男 (2009): 高機能広汎性発達障害者に対する「エブリクラブ」の実践に関する報告 (第2報), 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 8, 263-274.
- 14) 芦澤清音, 宇根本聡 (2002): 思春期を迎えたLD児及びその周辺児の居場所作り・仲間作りの取り組み, LD研究, 11, 1, 49-58.
- 15) 末永カツ子, 蔦森武夫, 吉成静枝, 堀越秀範, 高橋桃代 (2003): 高機能自閉症への小集団支援の試み, 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集, 426.
- 16) 定徳京子, 森本奈央, 清水聡 (2012): 地域に根ざした発達障害児者への長期的な支援を行うNPO法人の取り組み②～小学生SSTグループでの“こみゅカルタ”の開発, 一般社団法人日本LD学会第21回大会発表論文集, 354-

- 355.
- 17) 西村優紀美, 小貫悟, 村田淳, 高橋知音 (2012): 発達障害のある大学生に対する小グループ活動の試み, 一般社団法人日本LD学会第21回大会発表論文集, 218-219.
- 18) 佐々木全, 三田敏明 (2009): 地域の市民活動による, 軽度発達障害のある児に対する休日活動提供の現状—岩手県内3つのグループによる「通所支援教室」の運営上の課題, 日本発達障害学会第44回大会発表論文集, 180-181.
- 19) 佐々木全, 佐々木章, 安部千恵子, 三田敏明 (2009): 軽度発達障害児に対する「SST教室あじっこ」の実践報告, LD研究, 18, 2, 147-154.
- 20) 佐々木全, 高橋祥子, 三田敏明 (2011): 軽度発達障害児に対する「わくわく教室」の実践報告, LD研究, 20(1), 109-120.
- 21) 佐々木全, 名古屋恒彦 (2012): 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第14報）—個別支援計画を焦点とした, 実践論と運営論の包括的検討—, 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 11, 219-232.
- 22) 佐々木全 (2013): ラ・セ・ン「A c t .」の運営状況, はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会（花童・風童）年報, 8, 42-43.
- 23) 前掲文献1)
- 24) 前掲文献13)
- 25) 佐々木全 (2013): 発達障害児（者）に対する「本人活動」における運営実態—岩手県内8グループを対象としたアンケート—, はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会（花童・風童）年報, 8, 27-41.
- 26) 島田恒 (2005): N P Oという生き方, P H P新書, 159.
- 27) 前掲文献13)
- 28) 佐々木全 (2011): リンク×リンク ものづくりの実践例2—木製万年暦, はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会（花童・風童）年報, 8, 54-56.
- 29) 佐々木全 (2011): リンク×リンク エブリの会, 毎年恒例・デイキャンプ, はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会（花童・風童）年報, 8, 10-11.
- 30) 佐々木全, 名古屋恒彦 (2014): 高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第18報）—単元「タグラグビー」における, 支援方法としての「活動内容及び展開」の検討—, 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 13, 203-213.